

3

広島県立
神辺旭高校

マスタールーブリックを礎に、 生徒の主体的な学びを支援する

広島県立神辺旭高校は、新教育課程の編成と並行して、教育活動全体を通して育成を目指す5つの資質・能力を設定し、それぞれの資質・能力の到達レベルを4段階で示すマスタールーブリックを作成。自校が育成を目指す資質・能力について、教師間で共通認識を図り、組織的な授業改善を進めている。

※学校概要、教師のプロフィールは、P.24に掲載。



同校の新教育課程及びその編成に向けた取り組みは、本誌4月号・特集P.16~19をご覧ください。

育成を目指す資質・能力を共有し、 生徒の実態把握と授業観察を推進

広島県立神辺旭高校では、全教師による議論を経て作成したマスタールーブリック(図)を活用して、育成を目指す資質・能力についての共通認識を図りながら、授業改善を進めている。同校の学校経営計画では、ICTを活用して基礎的・基本的な学力を確実に身につけ、自分から進んで課題について他者と対話し、考えを深めることができる授業の実践を行動目標としている。そのため、教師たちはICTを活用し、生徒が協働

的に問題解決に取り組む機会・時間を確保する工夫をしている。各教科・各教師で授業改善を進めるため、そして、取り組みの成果を検証するために、同校が年間を通じて推進しているのが、教科を超えた相互授業観察だ。相互授業観察は、授業者となる教師が、他の教師に観察してもらいたい授業上の工夫点などを授業観察票で明示した上で実施される。ICTの活用、グループワーク、教科横断型の授業のあり方などを考える

機会になっている。授業改善に向けたアイデアは、相互授業観察以上に、その後の教師間での対話によって多く得られていると、上村純先生の『英語コミュニケーション』(授業実践はP.22参照)の授業を見学した西村由先生は説明する。「上村先生の授業では、他者との協働を通して主体性の育成を図ろうと感じました。私は、自分の授業に対する課題感を打ち明け、上村先生と授業改善に向けたアイデアを出し合いました。そうした教師間のコミュニケーションが、授業改善の推進力になっていると感じます」

図 マスタールーブリック

	知識・技能	達成			
		レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
①	基礎的・基本的な知識の習得だけでなく、習得した知識を体系的に、必要な場面で適切に活用できる力。	基礎的・基本的な知識を習得しようとしている。	新出事項を既習事項と関連して理解しようとしている。	新出事項を既習事項と関連して理解し、それぞれの知識の関連性を整理しようとしている。	新出事項を既習事項と関連して理解し、それぞれの知識の関連性を整理し、場面に応じて活用して課題を解いている。
②	周囲の友人を尊重し、自分の所属する集団をよめるために周囲と協働し、集団を構築していく力。	集団の中で、ルールに従って、指示されたことに一人で取り組むことができる。	集団の中で、自分の役割を自覚し、指示されたことに取り組むことができる。	集団の中で、自分の役割を自覚し、行動するだけでなく、周囲への支援をおこなうこともできる。	集団の中で、互いの異なる役割の力を最大限に活用し、相互に支え合いながら課題に取り組むことができる。
③	物事を批判的に複数の側面から見て、課題解決に必要な手立てを考えることができる力。	与えられた課題を解決するために何が必要か考えることができる。	与えられた課題を解決するために必要な方法を筋道立てて考えることができる。	設定した課題を解決するために必要な方法を筋道立てて考え、他の知識的な方策も考えられることができる。	設定した課題を解決するために必要な知識的な方策を筋道立てて考え、課題解決に向ける最も効果的な方策を評価できる。

※学校資料をそのまま掲載。

- 1 目標・ビジョンの共有
- 2 授業実践上の共通の指針
- 3 各教師の創意工夫
- 4 成果検証の仕組み

14:35 本時を貫く問いを生徒自身が設定



地震の震源と火山が記された世界地図を見て気づいたことを生かして、「なぜ」で始まる問い(本時のメインエスチョン)を、生徒一人ひとりが自由に設定。その問いの解決を目指して授業が再開した。問いとその答えは、授業中に生徒間で共有された。

14:25 パフォーマンス課題を再確認



授業の冒頭では、本単元で取り組むパフォーマンス課題「任意の都市で住宅購入や賃貸契約をする場合、地形・気候・環境問題を考慮すると、どのような保険に加入するのがよいか」を改めて確認した。その上で、前時の学習内容の振り返りを行った。

地理

パフォーマンス課題や本時の問いを通して、生徒が互いに考えを深め合う

本時の概要

【対象】教科/科目 2年生/地理/地理B 【分野・単元】第1章 自然環境 第1節 地形(全10時間のうちの3時間目) 【育成を目指す資質・能力】思考力、判断力、表現力、主体性 【学習内容】前時では、日本の地形と災害について学習し、地震・火山の分布に関して、生徒一人ひとりが問いを立てた。本時では、プレートについて学習し、前時の問いの答えをまとめ、地震、火山を考慮した保険プランを考えるパフォーマンス課題に取り組んだ。



30歳担任
前田智子
またた・ともこ
教職歴4年。同校に赴任して4年目。地理歴史・公民科。

「何ができるようになるか」を生徒と見通す

担当する地理の授業では、単元の最初に、その単元を学習することで何ができるようになることを目指すのか、単元のねらいと学習活動の見通しを説明し、生徒の主体的な学びを支援するようにしています。

① 単元のねらいを本校の生徒に合った言葉にしていく際、私が立ち返るようにしているのが、学習指導要領と本校のマスターループブックです。中でも、マスターループブックには、育成を目指す資質・能力を発揮した時の本校の生徒の姿が記述されていますので、マスターループブックを単元ごとに確認すれば、各単元のねらいとそれを達成するための授業計画が考えやすくなります。

マスターループブックを活用していなかった時は、私の説明を生徒が理解することをゴールとした授業計画を立てていたように思

います。しかし今は、「授業で育んだ力を用いた問題解決」をゴールとして授業計画を立てています。毎時の始まりに、その単元のパフォーマンス課題について言及するのも、何ができるようになるために学んでいるのかを生徒に意識してもらうためです。

本単元では、地形・気候問題・環境問題を学び、国内外の都市ごとに、マイホームの購入時や賃貸契約時に加入すべき保険プランを考えることをゴールに学習に取り組みしました。地形の学習終了時に保険プランを作成し、その後の気候問題、環境問題の学習終了時に、それまでに考えたプランを修正することから、単元を通して課題に向き合うこととなります。

他教科の教師と協働して授業を改善

本時は、相互授業観察として他教科の先生方が見学にきました。相互授業観察後の先生

- 主 主体的な学び
- 対 対話的な学び
- 深 深い学び

- 1 目標・ビジョンの共有
- 2 授業実践上の共通の指針
- 3 各教師の創意工夫
- 4 成果検証の仕組み

本時のキー課題

単元の指導計画は、VIEWnext ONLINE に掲載。「TOP → 学校教育情報誌『VIEW next』 → 高校版バックナンバー」、または下記2次元コードからご覧ください。



私の授業改善の展望

パフォーマンス課題は、授業で身につけた力を使って取り組む課題として生徒に提示しますが、何かで調べればすぐに答えにたどり着ける課題になってしまっていることがあります。授業に集中し、じっくりと考えたくなるパフォーマンス課題を追究していきたいと思っています。

パフォーマンス課題が、生徒にとって自分事として捉えることができ、没頭して取り組みたくなるものであれば、地理の授業だけにとどまらず、「総合的な探究の時間」や他教科の知識も生かして考察したいと、生徒は思っています。私自身も、他教科の内容を学ぶことはもちろん、REASAS（*）などの多様なツールの活用の可能性を模索しながら、広い視野で授業改善を図っていきたくと考えています。

15:00 パフォーマンス課題における自分の考えを入力



本時の最後に、本単元のパフォーマンス課題である、自分が選んだ都市で加入すべき保険プランを考えた。その際、本時で学んだ「プレート」「境界」という語句を使って、地震や火山の影響を踏まえたプラン選択の根拠を説明することを生徒に求めた。

14:50 教師の解説をヒントに、自分の問いに取り組む



震源と火山の関連について前田先生が解説。生徒は、それをヒントに、各自が設定した問いの答えを考えた。本時は、相互授業観察の対象授業であり、授業案が周知されていたため、生徒たちがキー課題に取り組む直前に、見学する教師が集まってきた。

方からのフィードバックは、授業改善につながる重要な視点を与えてくれます。例えば、授業の導入で、パフォーマンス課題の成果物の例をタブレットに配信し、具体的なイメージを持たせるようにしたのは、「言葉だけで説明するよりも、どんなものをつくるのか、形を見せた方が授業の見通しが立てやすくなる」という助言がきっかけです。

実は、マスタールーブリックができた当初、私は、単元のねらいを設定する際も、学習指導要領ばかりをよりどころにしがちでした。もちろん、それでも単元のねらいは設定できるのですが、次第に2つをつなげて、自校が育成を目指す資質・能力を踏まえた授業計画が立てられるようになると、相互授業観察などでの他教科の先生との対話がスムーズになりました。

互いの考えを磨き上げる授業を

本校では、教科会の時間が毎週必ず設定されています。その時間に、パフォーマンス課題や、毎回の授業で生徒が考える「メインエスチョン」の立てさせ方について、同じ教科の同僚から意見をもらいます。

生徒間でのメインクエスチョンやパフォーマンス課題の成果物の共有は、生徒にとって多様な他者との対話的な学びの時間です。私も毎授業でそうした時間を確保しています。ただ、単に考えを生徒同士で披露し合うだけではなく、互いに批判し、学びを深める経験が重要です。資質・能力の伸張には他者の存在が関与していることを、生徒が自覚できる授業を、これからも追究していきたいと思っています。

* 地方創生の取り組みを情報面から支援するために、経済産業省と内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局が提供する、地域経済分析システム。人口動態や産業構造、人の流れなどの官民ビッグデータを集約し、可視化する。https://resas.go.jp/

10:50

動詞を見つけ、ペアで確認

2



生徒はまず、ワークシートに記載されている英文を読み、動詞を探した。品詞や意味が分からない単語については、辞書を使って確認した。その後、ペアで答え合わせをし、答えが異なった箇所については話し合い、合意できる答えを2人で導き出した。

10:30

本時の活動とその目的を説明

1



上村先生は、本時の冒頭で、「長文読解が苦手という高校生は少なくない。今日の授業では、動詞と主語に着目しながら、チャンクごとに内容を理解し、長文を読む力を高めていこう」と、本時の活動の内容と、その目的を生徒に説明した。

英語

教科団で生徒の実態をつぶさに把握し、土台となる共通の授業計画を作成

本時の概要

【対象／教科／科目】1年生／英語／英語コミュニケーション1 【分野・単元】CREATIVE English Communication I - Lesson4 "What Do You Eat for Lunch?" (全3時間のうちの1時間目) 【育成を目指す資質・能力】知識、技能、思考力、判断力 【学習内容】各文の中の動詞と主語を見つけてる活動を通じて、チャンク(＊)ごとに内容を理解することで、長文が読みやすくなることを生徒に気づかせた。

各科目で共通の授業計画を立案

英語科では、教科で育成を目指す資質・能力を踏まえ、科目ごとに単元の授業計画を立案するオーガナイザーを設定し、オーガナイザーが提案する授業計画案を参考に、各教師はそれぞれ授業を行っています。私は、「英語コミュニケーション」のオーガナイザーを務めています。一つひとつの授業の進め方については、各先生にお任せしています。例えば、前の単元では、共通のパフォーマンス課題の実施と共通のプリントの使用だけは決めていましたが、授業中にタブレットを活用するかなどは教師によって異なりました。本単元では、次のような経緯があり、リーディング・リスニングに特化した指導を行うことにしました。

英語科では、1学期の中間考査後の6月に、それまでの授業での生徒の様子と、パフォーマンス課題や定期考査の結果を、週1回開催される教科会などで共有し、今後の授業のあり方について話し合いました。その結果、「英語が分かるようになってきている」といった実感を生徒にもっと味わわせるため、苦手意識を持っている長文読解に焦点をあてた指導が必要だという認識で一致しました。一方で、本校に入学したばかりであるにもかかわらず、ペアワークに積極的に取り組んでいるといったよい面も、多くの先生が挙げていました。私は、そうした1年生の現状を踏まえて、本単元のオーガナイザーとして、協働的な学びを取り入れたリーディング・リスニングの授業計画を立案することにしたのです。

生徒の状況を踏まえて、単元目標を設定

本校の生徒は、単語を覚えることは得意ですが、長文読解になると、「どのように読んでいけばよいのか分からない」といった声が多



1学年担任
上村 純
うえむら・じゅん
教職歴8年。同校に赴任して4年目。英語科。

- 主 主体的な学び
- 対 対話的な学び
- 深 深い学び

- 1 目標・ビジョンの共有
- 2 授業実践上の共通の指針
- 3 各教師の創意工夫
- 4 成果検証の仕組み

*複数の単語で構成された、意味のある短文の英語表現

単元の指導計画は、VIEWnext ONLINEに掲載。「TOP → 学校教育情報誌『VIEW next』 → 高校版バックナンバー」、または下記2次元コードからご覧ください。



私の授業改善の展望

私は、本校のカリキュラムプロジェクト会議推進リーダーとして、カリキュラム・マネジメントに関する校内研修会の企画・運営を担当しています。これまでの研修会では、「授業のタイムマネジメントが甘く、教科書をこなすことを優先してしまった」といった率直な反省が聞かれました。英語科も、育成を目指す資質・能力を意識しても、その育成の到達状況を検証する仕組みづくりには、まだまだ進化の余地が残されていると思っています。

今後は、P D C Aサイクルの中でも、C・Aにあたる部分の充実が求められているのですが、マスタールーブリックを、各教科を超えた共通言語とすることで、資質・能力の育成につながる授業改善を組織的に進めることができるのではないかと期待しています。

本時のキー課題

11:05 学習内容を振り返り、さらに問題に取り組む



主
対
深

動詞と主語を見つけてチャンクごとに内容を把握する本時の活動の意味を、上村先生が改めて説明した。その後、生徒は、上村先生が提示した日本語と意味が同じ英語表現を、教科書に記載されている文章の中から、指定された語数で探した。

11:00 動詞、主語を確認し、チャンクの内容を理解



主
対
深

上村先生は、動詞を見つけることで主語が見つけやすくなることを生徒に説明。そこで、次は主語を探させた。その後、主語が正しく見つけられているかをペアで確認し、チャンクごとに内容を把握させた。

く上がります。そのような生徒は、1単語ずつ意味や内容を理解しながら長文を読もうとしているのではないかと仮説を立てました。そこで、本単元では、長文はチャンクごとに内容を理解すればよいこと、1つの文を読む際には、動詞に着目すると主語が把握しやすいことを、本校の生徒が得意なペアワークを繰り返す中で、生徒に実感させようと考えました。学習内容を自分の課題として捉えさせることで「主体的な学び」を、身につけた知識をペアで活用させることで「対話的な学び」を、そして、英語によるコミュニケーションにおける見方や考え方を働かせることで「深い学び」を実現させたいと考えました。本時は、相互授業観察の対象でしたので、他教科の先生方も見学に来ました。ある先生から「1人で長文に向き合えるようになるという、中期的な学びの見通しを持つことの大切さを、授業の冒頭で生徒に具体的に説明してもよかったと思う」と、助言をもらいました。

実は、教科団で本単元の授業計画案を共有した際には、「1学期最後の単元なので、夏季休業中、教師の手から離れて1人になっても英文に向き合えるよう、読解力の土台を固めさせたい」と先生方に話していました。そうしたことは生徒にも伝えるべきなのだという気づきを、本時を相互授業観察の対象にしていたおかげで得ることができました。

「できる」が実感できる授業を

本単元では、内容理解から読み方の理解へと指導の重点を変えたわけですが、単元ごとにマスタールーブリックを基に生徒が自身の学びを振り返り、そこから生徒の状態を教科団で把握しているからこその変更です。

生徒のできていないところを把握しながら授業や定期考査をつくることで、生徒が「できるようになった」と実感できる場面をもっと増やしていきたいと思っています。

育てたい生徒像を踏まえて、 生徒の内に次の問いを生む授業を

① マスターグループブリックを通じた育成を目指す資質・能力の共有と、相互授業観察を始めたところ、超えた教師間のコミュニケーションによって、組織的な授業改善に取り組んでいる神辺旭高校。同校の相互授業観察には、普段授業を担当しない管理職も積極的に足を運び、意見を述べる。20年ほど前に同校の教壇に立ち、今年度から教頭として赴任した内田仁教頭は、育てたい生徒像の変化を念頭に、これからの授業のあり方を提言する。

「教師を信頼し、日々の授業や家庭学習の課題に真剣に取り組む



教頭
内田 仁
うちだ・ひとし
教職歴32年。同校に赴任して1年目。



校長
三浦喜成**三浦 喜成**
みうら・よししげ
教職歴29年。同校に赴任して1年目。

本校の生徒の気質は今も変わりません。ただ、これからの社会では、与えられた役割を率先してこなすだけでなく、取り組むべきことを主体的に見つけていく力が必要です。相互授業観察でも、自主性と主体性の違いに留意することで、

グループワークの進め方や家庭学習の課題のあり方の検討、深い学びへと生徒を誘う本質的な問いを生み出すための授業準備などについて、踏み込んだ議論ができるのではないかと思います」

22年度は、マスターグループブリックを基にした各教科・科目の単元グループブリックの作成と並行して、



教育情報部主任
西村 由
にしむら・ゆう
教職歴21年。同校に赴任して5年目。理科。



主幹教諭
小野塚慎一郎
おのづか・しんいちろう
教職歴21年。同校に赴任して1年目。地理歴史・公民科。

マスターグループブリックそのものの改訂も行っていると、主幹教諭の小野塚慎一郎先生は説明する。

④ 「7月までに、マスターグループブリックに関する研修会を2回開催し、マスターグループブリックに基づいた授業実践の手応えや課題感を共有しました。本校では、今年度から総単位数を31単位に減らしていますが、主体的な活動にもっと取り組めるよう、生徒に時間を返すことで生まれる生徒間の学びの違いをどこまで許容するのか、それはグループブリックではどのように記述されるべきかといったことが話題になり、生徒の実態を注視しながら、グループブリックの改善を続けていくことになりました」

22年度に同校に赴任した、三浦喜成校長は、「主体的・対話的で

深い学び」を授業で実現するため、今後はさらに、「生徒の変化を予測し、促す授業」を学校全体で追究していきたいと、展望を語る。

「新学習指導要領の実施を機に、本校は総単位数を減らし、生徒に学びを委ねる指導へと転換を図っています。事実、授業を見ると、先生方はICTを効果的に活用し、教え過ぎないように気を付けるとともに、その日の授業の目標を丁寧に伝え、授業の最後には、成果や課題を振り返らせるなど、新しい授業スタイルへと変わります。生徒を深い学びへと導いていきます。地理の相互授業観察では、前田先生の説明を聞く生徒から、『だったら、これはどうなるのだろうか?』などと、目の前の授業の『次』にあたる内容を自ら問うような言葉が聞こえてきました。そのような、生徒から生まれる問いを察知して、生徒に次の問いを与える授業が、本校の時間を埋め尽くせば、生徒たちは常に知的な問いを持って、楽しく頭を回転させ続ける3年間を送ることができるとおもいます」

学校概要
設立 1980(昭和55)年
形態 全日制/普通科・体育科/共学
生徒数 1学年240人
2022年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、島根大、山口大、香川大、愛媛大、福山市立大、尾道市立大などに28人が合格。私立大は、明治大、京都産業大、同志社大、龍谷大、関西大、近畿大、関西学院大などに延べ274人が合格。